

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22402035

研究課題名(和文) アジアメガシティの多層化するモビリティとコミュニティの動態に関する経験的研究

研究課題名(英文) Empirical studies on dynamics of multilayered mobility and community in Asian mega-cities

研究代表者

吉原 直樹 (YOSHIHARA, Naoki)

大妻女子大学・社会情報学部・教授

研究者番号：40240345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円、(間接経費) 4,260,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ジャカルタおよびバリのデンパサールを事例として、研究課題をめぐって資料サーベイ、ヒヤリング等を実施した。そしてそれらを通して明らかになったのは、(1)アジアメガシティがグローバル化の進展とともに「アジアの都市回廊」を越えて東京などのグローバルシティとの横のむすびつきを強め、ボーダレスなモビリティ(ヒト、モノ、カネ、情報などのフロー)の結節点となっていること、そして(2)そこでは多様なエスニシティがせめぎあうハイブリッド社会が構成されるとともに、コミュニティにさまざまな分岐(ディバイド)がもたらされ、それがメガシティのあらたな緊張要因となっていることである。

研究成果の概要(英文)：From a series of surveys and hearings carried out considering Jakarta and Denpasar as examples, we learned that Asian mega-cities served as nodal points of borderless mobility, flows of humans, things, money and information, more strongly in the horizontal connection with global cities, such as Tokyo, exceeding "the city corridor of Asia" with progress of globalization, and that they constituted a hybrid society, in which various races contended with each other and brought various divides to the community, and therefore were new strain factors.

研究分野：社会科学C

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：アジアメガシティ コミュニティ 防災コミュニティ モビリティ グローバル化

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化の進展に符節をあわせた、域内移動にとどまらないアジアメガシティにおける一時滞在出稼ぎ労働者やムスリムの存在形態に関する研究や、「企業移民」に還元されないアジアメガシティの日本人を対象とする「海外移民」研究が個別分散的であられ、それらが従来の都市構造分析やコミュニティ研究などと共振するなかで、新たな視点で上述の研究を統合する必要が生じた。

(2) それは具体的には、都市上層・中間層、「企業移民」/「海外移民」層、そして肥大化するインフォーマルセクターに参入する、域外からの移民労働者を担い手とする都市下層 (urban underclass) が複雑に交錯しながら織りなす空間的凝離 (segregation) / 分化の形態 (スラム、カンポン (都市集落)、ゲートドコミュニティなど)、さらにそれにもなつて立ちあられる離散的な社会的、文化的配置状況 (configuration) を、ジャカルタおよびデンパサールの複数のコミュニティをフィールドに据えて明らかにする研究への期待となつてあらわれた。

2. 研究の目的

(1) アジアメガシティとして台頭著しいジャカルタおよびデンパサルにおける複数のコミュニティをフィールドにして、グローバル化の進展とともに多層化し分極化するヒトの移動 (モビリティ) とそれに伴う地域社会の変容を、都市空間の構造再編 (urban restructuring) の動向とかかわらせて明らかにする。

(2) 上記のヒトの移動と地域社会の変容を貫く、「多文化社会状況」から「単一文化への希求」へと誘うコミュニティの機制 (メカニズム) と、NGO やボランティア・アソシエーションなどとの対立および協働を経て自らセーフティネット装置へと反転する「もう一つ」のコミュニティの機制 = コミュニティ・ソリューションの「かたち」を浮き彫りにする。

(3) 上記の作業を経て、今日グローバルネットワークの拠点的機能を担いつつあるアジアメガシティの複層化するコミュニティの位相を示す。そしてそのことを通して、現にさまざまなリスクを抱え、困難な日常生活を送っている人びとが自らの「立ち位置」を自覚的に検討し、セーフティネットを再構築する際の素材を提供する。

3. 研究の方法

(1) 上記の目的を達成するために、主に二つの作業、すなわち、現地で調査し、分析する作業 (いわゆるフィールドワーク) と日本国内で上記のフィールドワークの成果を系統

的に整理し検討する作業 (研究会方式) をおこなつた。具体的には、海外でコミュニティへのアンケート調査、複数のインフォーマント (各種公務員、専門研究者) へのヒヤリング、資料サーベイそして分析作業を実施した。そして日本国内で上記収集資料の統計的処理 / 解析、その結果の個別的、集团的検討作業を実施した。

(2) 以上二つの方法によって得られた研究成果を年次毎に研究会とか学会などで報告することによって、研究成果のフィードバックとフィードフォワードをこころみだ。そして方法の刷新をおこなうとともに、あらたなる方法上の課題の抽出につとめた。その際、きわめて重要な役割を果たしたのが、資料集の作成と中間報告書 (もっぱらメンバーの間で共有するもの) の作成である。これらによって当初計画の進捗状況を確認するとともに、研究方法を常に再審することが可能になった。さらに研究方法の再審にとって有意義であったのは、現地報告会での成果報告の発表である。これによって、成果の地元還元が方法的スケジュールの中に組み込まれた。

4. 研究成果

(1) 現地調査と国内での成果集約作業が有機的にかみあひ、当初立てた計画・目的のかなりの部分が達成された。また研究成果の発信も、以下の5.に見られるように順調に進んでいる。さらに現地共同研究者との協働も予想していた以上に進展し、国際共同研究としての質も一定程度確保された。さてその上で、具体的な成果を記すと、以下のようになる。

(2) ポスト・オルデバル (スハルト新体制) への移行とともにみられたジャカルタの都市構造再編は、ネオリベラリズム的政策環境の下で強行されたものであり、デレギュレーション (規制緩和) に誘われたジェントリフィケーションとスラム・クリアランスを徹底的に押しすすめた。本研究では、そのことによってカンポンに深くねざしていた「貧困の共有」 (shared poverty) が根こそぎにされるとともに、RT/RW (隣組 / 町内会) において担保されていた「生活の共同」の枠組みが壊されてしまったこと、そして外来的なNPO/NGO が未だ「生活の共同」の枠組みを再構築し得ていないことを明らかにした。

(3) RT/RW の変容が著しい。特に都市中心部の RT/RW では機能的形骸化が進んでいて、無関心層の増大、個人化の進展と相俟って、組織的維持もままならないケースが増えている。「あるけど、ない」といった RT/RW が常態化している。多くの人びとは、コミュニティにセーフティネットの役割をもとめていない。しかし他方で RT/RW は「上から」のガバメント (統治) にますます組み込まれる

ようになっているとみている。本研究は、こうしたことから RT/RW が住民と行政に間にあって「宙吊り」状態にあることを示した。同時に、ヒヤリングの結果等を用いて、RT/RW がリーダーによっては、地域管理の主体になり得るし、行政との協働も可能になるということを示した。

(4) バリのバンジャールの二元的構成 (adat : アダット = 慣習と dinas : ディナス = 行政から成る) とギアーツのいう多元的集団構成をデンパサル中心部、郊外、純農村の三地区のバンジャールで確認するとともに、それらの変容の相を明らかにした。そうした中であってとりわけ注目されるのは、中心部ではアダットがディナスに一元化される傾向にあるのに対して、純農村地区でアダットとディナスの二元的構成が依然として守られていることである。さらに注目されるのは、郊外のモスリムのバンジャールでは、バリ・ヒンズーの教義を引き継いでいるアダットを維持しており、イスラームの「土俗化」が観られることである。こうしたことから、グローバル・ツーリズムのコミュニティへのインパクトが一様でないことがわかった。

(5) バンジャール (banjar: 集落) に伝わる伝統文書アウィグ・アウィグ (Awig-awig : バンジャールやスバック (水利組織) の運営・管理に関する取り決め・約束ごとを記したものの) の一部を新潟大学中村潔教授の指導の下に翻刻・解説し (英語および日本語) それを『バリ島に生きる古文書 ロンタル文書のすがた』として刊行した。同時にその成果をバリのウダヤナ国立大学との共催の国際セミナーで発表し、現地新聞 (『バリポスト』紙等)・テレビ (『バリ・テレビ』等) で大々的に取り上げられた。なお、このセミナーを契機として、地元主導のアウィグ・アウィグの編纂・刊行の動きが広がっている。

(6) (5) でみられるような「ローカリティの再発見」の動きは、バリのさまざまな社会領域において立ちあらわれている。その最たるものは、アジェグ・バリ (ajeg Bali) といわれるバリ復興運動である。アジェグ・バリはバリ語の学校教育における必修化からはじまって、ジャワ人の外食文化を支えてきたカキリマ (屋台) の禁止、「古きよきバリの街並みの復活」にまでおよんでおり、バリ人にとって「異質なものを」を排除するといった動きがアジェグ・バリの進展とともに広がっている。本研究では、こうした動きをグローバル化にともなうローカル・アイデンティティの主張とみなすとともに、その「閉じられた性格」がコミュニティに深い影を落していることを明らかにした。

(7) バリでは、前述した二元的構成からなる、ローカル・コミュニティのバンジャール

と外からの移民を主体とするエスニック・コミュニティがせめぎあっている。ところで外からの移民は、一方で一時滞在の出稼ぎ労働者、他方で日本人社会に典型的にみられるような「ライフスタイル移民」に二分される。本研究では、こうした性格の異なる移民がバリ社会を高度にハイブリッドな社会にするとともに、コミュニティにこれまでに見られなかったようなディバイドをもたらしていることを明らかにした。それはエスニック・コミュニティの内部だけでなく、エスニック・コミュニティ間でも広く観られるようになっている。ちなみに、日本人社会についていうと、ディバイドは移入時期によって、また移入目的によって広がる傾向にある。そして「ライフスタイル移民」自体、「モデル・マイノリティ」からコーエンのいうような「グローバル・ディアスポラ」にまで及んでいることがわかった。

(8) なお、本研究によって得られた以上の知見 (findings) は、一定の理論的枠組みの下で再整序し、最終成果物として刊行するとともに、デジタル情報にしてネットでも公開する予定である。そして、現在その作業が着々と進んでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

吉原 直樹、松本 行真、イマデ・ブディアナ、バリにおける日本人向けメディアの動向、ヘスティアとクリオ、査読有、10 巻、2011、33-50

ISSN 1880-4284

吉原 直樹、「市民」であることのむずかしさ、三田社会学、査読有、16 巻、2011、37-47

ISSN 1349-1458

吉原 直樹、松本 行真、イマデ・ブディアナ、海外日本人社会のネットワーク形成と情報環境に関する一事例的考察、査読無、社会情報学研究、21 巻、2012、107-121

ISSN 1341-7843

[学会発表](計 1 件)

吉原 直樹、Why is the Local Knowledge asked now? (基調報告) ウダヤナ大学・大妻女子大学共催国際シンポジウム、2011 年 8 月 25 日、ウダヤナ大学

[図書](計 7 件)

吉原 直樹、作品社、コミュニティ・スタディーズ、2011、396

吉原 直樹 他 (編訳) 東信堂、バリ島に生きる古文書、2012、136

Yoshihara, N. (ed.), Global Migration and Ethnic Communities, Trans Pacific Press, 2012, 262

吉原 直樹 他、慶應義塾大学出版局、現代における人の国際移動、2013、474

吉原 直樹 他、ミネルヴァ書房、グローバリゼーションの社会学、2013、324

吉原 直樹 他、風媒社、日本文化の明と暗、2013、268

倉沢 愛子 他、慶應義塾大学出版局、消費するインドネシア、2013、310

〔その他〕

ホームページ等

<http://n-yoshi.sakura.ne.jp/yoshi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉原 直樹 (YOSHIHARA, Naoki)
大妻女子大学・社会情報学部・教授
研究者番号：40240345

(2) 研究分担者

倉沢 愛子 (KURASAWA, Aiko)
慶應義塾大学・経済学部・名誉教授
研究者番号：00203274

長谷部 弘 (HASEBE, Hiroshi)
東北大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：50164835

(3) 連携研究者

松本 行真 (MATSUMOTO, Michimasa)
東北大学・災害科学国際研究所・准教授
研究者番号：60455110